

## 第十五部会

## 沖縄宮古島北部の祭祀儀礼について

川田 桂

沖縄県宮古島北部に位置する狩俣、島尻、大神島の三部落では、ウヤガン祭とよばれる、その地域に住む女性達のみによって集団的に行われる村落祭祀が行われている。そこでは、神役の女性に神が憑依するとされており、いわば憑依型ともいうべき祭祀形態が伝えられている。

ウヤガン祭の儀礼の中心を構成する御嶽での行事内容は、島外の人々にはもちろん、村の人々にも秘され、家族にも話してはならないとされており、その禁忌は今でも厳格に守られ続けている。したがってその具体的内容はあまり知られていない。

このような憑依型の祭祀形態を伴う女性村落祭祀であるウヤガン祭は、島尻部落では一九九七年まで、狩俣部落では二〇〇三年まで行われていたが現在は中断されており、現在なお続けられているのは大神島のみである。

日本本土では、女性による村落祭祀そのものが、ほとんど存在せず、また、沖縄でも女性村落祭祀は見られても、憑依形態のそれは宮古島北部の三地域以外ではすでに早くからみることができない状態であった。

また、この狩俣、島尻、大神島の三地域では口頭伝承のみに

よる「神歌」が一種の神話的伝承として古くから受け継がれている。このような神歌の伝承も日本本土ではまったく消失し、沖縄地域でも見られるところは多くない。

これまで、当該地域に関して、狩俣や島尻のウヤガン祭については複数の調査報告があり、また、狩俣の神歌については、主要なものは採集されている。しかし、それらの祭祀儀礼や神歌のベースとなっている、いわゆるウヤガン信仰とそれを支える村落生活の全体像を明らかにし、分析・検討を加えた研究は、これまでのところあまりみられない。

本発表では、宮古島北部のウヤガン信仰について、狩俣、大神島のウヤガン祭の儀礼および神觀念について考察を行うものである。

## 宗教的職能者の選択

——現代沖縄の死者儀礼を事例として——

越智 郁 乃

これまでの民俗学、人類学的沖縄研究は、地理的空間を限定した地域に先祖代々住んでいる人々を対象にするという暗黙の前提があった。そのため、今日の都市部を形成している「移動者」のような存在は対象とされず、沖縄の文化や社会が抱える現在の状況が捉えにくいという指摘がなされてきた。また、民俗宗教においては、外来宗教に対する固有の信仰体系としての